

ふじのくに型福祉サービスに基づく共生型福祉施設における交流と空間構成、運営実態に関する研究
その2 行動観察調査からみた活動実態と空間の関係

5. 建築計画 3. 施設計画 q. 複合化・共用・転用

共生型福祉施設 地域拠点 共有
ふじのくに型福祉サービス 空間構成

准会員 ○ 阿部朱里^{*1} 正会員 脇坂圭一^{*2}
正会員 伊藤勢来^{*3}

1. 研究の概要

その1では、「ふじのくに型福祉サービス」に基づく4施設を対象として、平面計画およびボリューム構成の比較に施設管理者へのヒアリングを重ね合わせ、利用実態との対応関係を踏まえながら、共生型福祉施設の空間特性を検討した。とくに、「平屋一棟型／分棟型」、「複層一棟型／分棟型」、「食事室共有型／食事室分離型」といった類型を抽出するとともに運営上の違いを整理した。

その2では、行動観察調査を通じて高齢者・障がい者・子どもの活動実態を把握し、交流が生じやすい空間特性を明らかにすることを目的とした。1) どのような活動が行われているかという活動の種類、2) 高齢者・障がい者・子ども間の関わり方に着目した利用者の構成および活動実態、3) 共用空間と専用空間の位置、ならびに高齢者・障がい者・子どもの身体の向きや居場所などの空間特性である。以上の3視点から交流実態を分析し、共有を支える空間のあり方を検討した。

2. 研究の方法

1) 対象施設4ヶ所において、各施設2日間（各日11:00～15:00）の行動観察を実施した（図2）。カメラ撮影および平面図へのプロットにより、共用空間における高齢者・障がい者

表1 施設別利用者活動の実態

	おっけい	喜楽庭	やまびこ	きじの里
3者交流	○高・障・発達児			
2者交流		○高・障、高・発達児		
同じ属性交流			○	○



図1 施設別利用者交流の実態

者・子どもの位置および活動内容を記録した（その1・図2参照）。

2) 共用空間における滞在領域を5つの空間類型に区分し、「活動種類」「活動実態」「空間特性」の3つの視点から交流の実態を分析した。

3) 分析結果は、3章において各施設の一日の流れと活動種類を整理し、4章において属性別の滞在パターンおよび活動実態を示した。5章では、空間特性との関連を検討するとともに、高齢者・障がい者・子どもの身体の向きと居場所の関係から「空間の方向」を示し、考察を行った。

3. 行動観察調査の結果

3-1. 調査結果

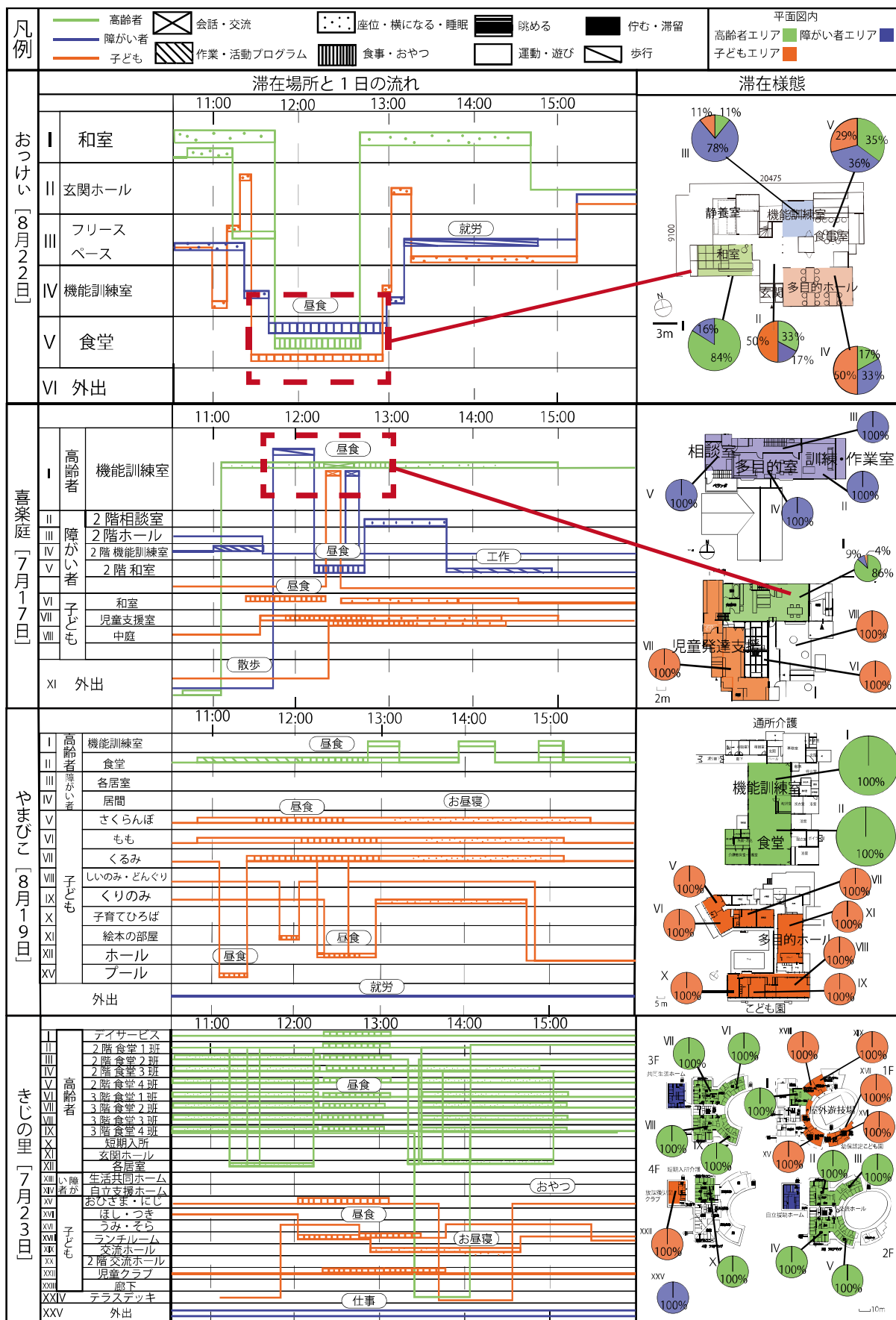
行動観察の結果、「おっけい」では高齢者・障がい者・子ども（障がい児）の3属性が同一場面に関与する3者交流が確認された。「喜楽庭」では異属性間の接点はみられたものの、交流は主に「高齢者―障がい者」「高齢者―子ども」の2属性間にとどまった。これに対し、「やまびこ」「きじの里」では、高齢者同士、子ども同士といった同属性内で完結する交流が中心であった（表1）。

3-2. 施設の1日の流れ

11時～15時の観察結果をもとに、属性別の活動場所と活動種類を整理したところ、生活リズムと活動には施設ごとの差がみられた（図1）。「おっけい」では、食事時のみ高齢者・障がい者・子どもが食事室に集まり、それ以外の時間帯は、就労継続支援B型利用者の就労活動と、高齢者・子どもの自由な過ごし方が共用空間内に併存していた。一方、「喜楽庭」「やまびこ」「きじの里」

A Study on the spatial composition and actual status of users in Fujinokuni-type welfare services.Part 2: Preliminary management structure involving the architecture

Akari Abe,keiichi Wakisaka,Sera Ito



では、属性・年齢別プログラムの一日の流れや特養入居者の居場所選択など、高齢者・障がい者・子どもの機能に応じた設定されていた。各施設は、全体で共有する時間と属性・年齢・ユニット別に分化した時間を組み合わせ、就労支援・ケア・保育といった機能に即した一日の流れを構成していた（図2）。

4. 利用者別の活動実態

4-1. 高齢者の居場所と活動実態

「おっけい」では、高齢者が和室のソファでテレビを視聴し、同一場所に長時間滞在する傾向がみられた（図3：写真2）。「喜楽庭」では、1階機能訓練室（通所介護）で椅子に座り、会話やレクリエーション等の集団的行為が継続した（図3：写真5）。「やまびこ」では、食事室（通所介護）でのぬりえ・工作等の静的活動と、機能訓練室（通所介護）での体操・レクリエーションが時間帯により切り替わっていた（図4：写真15）。「きじの里」では、食事室（特養・短期入所）で食事やテレビ視聴を中心に過ごしつつ、同じ場にとどまる人と居室へ戻る人が分かれるなど、共在のあり方と居場所選択に差がみられた（図4：写真12・13）。

4-2. 障がい者の居場所と活動実態

障がい者は主に「おっけい」「喜楽庭」で観察された。「おっけい」では就労継続支援B型利用者が機能訓練室や



図3 利用者の滞り場所の変化と一日の流れ

フリースペースに長時間滞在して就労活動に従事し、食事・おやつ時のみ他属性とともに食事室を利用して短時間の共在が生じていた（図3：写真1）。「喜楽庭」では、朝の会後に属性別の活動室へ移動し、職員の働きかけのもと、終日同室でプログラムや作業等のグ障がい者同士グループ活動や個人活動をしていた（図3：写真6）。

障がい者は日中の多くを就労・訓練・プログラムのための専用空間で過ごし、「おっけい」に限り昼食時に共有の食事室へ移動し、高齢者・障がい者・子どもが共在する活動実態が確認された（図3：写真1）。

4-3. 子どもの居場所と活動実態

子どもは、各施設で保育内容と生活リズムに応じて居場所を使い分けていた。「おっけい」では、昼食時に高齢者・障がい者とともに食事室を利用し、それ以外は各自が選んだ場所で睡眠やテレビ視聴を行うなど、共用空間での共在と個別的な過ごし方が併存していた（図3：写真3）。「喜楽庭」では、朝の会後は専用の保育室が主な居場所となり、子ども同士の関わりが中心で、高齢者・障がい者の空間や機能と分離していた。「やまびこ」「きじの里」のこども園では、年齢別保育室を拠

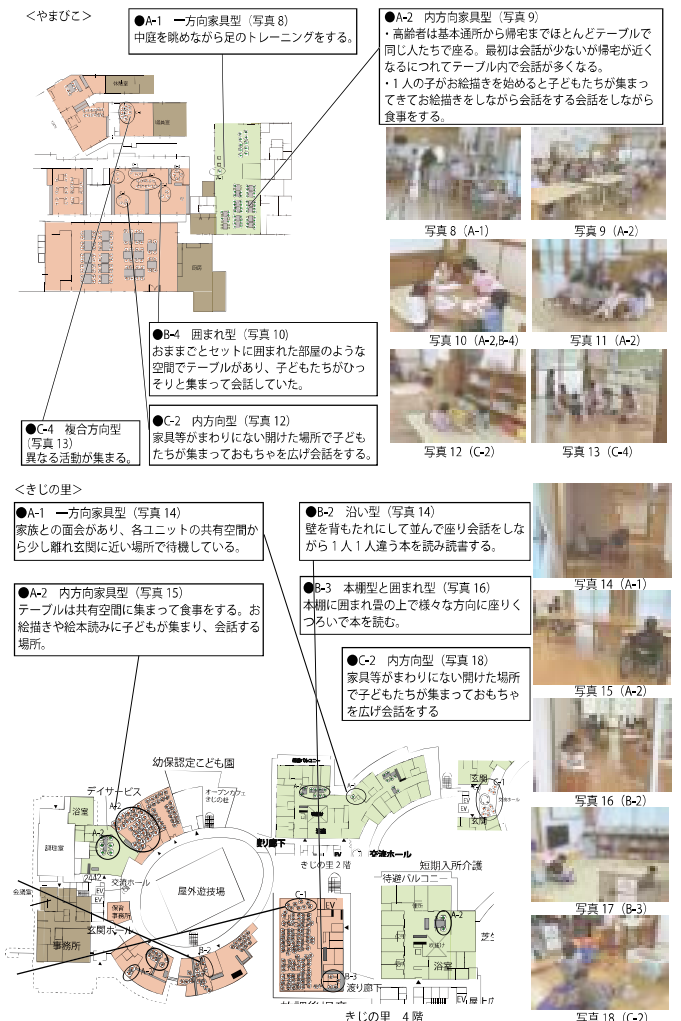


図4 利用者の滞り場所の変化と一日の流れ

点に、昼食や午睡等の生活リズムに合わせて食事室・午睡室へ集団で移動し、食事と午睡を中心とした同属性同士の集団的な交流が確認された（図4：写真12）。

5. 交流を促す空間の関係

5-1. 身体ベクトルにみる空間の方向類型

各空間には、利用者の身体の向きを特定方向へ誘発する性質がみられた。本研究ではこれを「空間の方向」と呼ぶ。「空間の方向」は、1) 滞在・活動時の身体方向性、2) 居場所となる空間特性、の2視点から整理でき、計9類型を抽出した。身体の向きを誘発する要素は、(A) 家具、(B) 設備、(C) なしの3区分とし、身体の方向性は(1) 一方向・(2) 内方向・(3) 外方向・(4) 複合の4区分で整理した。これらの組合せにより9類型化し、滞在特性を評価する指標として用いた（図3）。

5-2. 交流が生じやすい空間特性

交流が生じやすい空間では、家具・設備による「居場所」が身体の向きを方向づけ、近接と相互視認が成立しやすい。A-2（内方向家具型）は対面会話を促し、A-1（一方向家具型）は同一対象への注視や横並びの共有から交流が生じやすかった（図3：写真2、図4：写真8、11）。設備周り（B-1、B-2）は反復行為により接触機会を増やし、囲われた場（B-4）は少人数の継続的交流を支えた（図4：写真10、13）。食事・レクリエーション等の共同活動が中央配置や動線上の立地と重なると交流は増える傾向にあった。一方、生活空間（和室・居室・ユニット内小規模共用スペース）では個別の活動が中心であった。「おっけい」ではテレビ視聴をする場面（A-1）が多く、共にしつつ静穏に過ごす滞在がみられた（図3：写真1）。「やまびこ」「きじの里」では食後に食事室へ残る者と居室へ戻る者に分かれ、体調等に応じた居場所選択がみられた（図4：写真4、8）。子どもも午睡・



図5 施設別空間特性

描画（A-2）・遊びなど個別化された生活行為が観察され、生活空間は小規模で動線端部に位置し通過者数が限られるため、休息や長時間滞在に適する一方、自発的会話や属性横断的交流は少ない傾向がみられた（図4：写真8、11、12、13、14）。

6. 総括

本研究では、交流を促す空間条件を「身体の方」向」「空間構成」「ボリューム構成」の三要素として整理した。共用空間（食事室）では、机やソファ等の家具配置によって身体の方」向が内方向に誘導され、相互視認や近接が生じやすく、活動と交流が相互に作用する傾向が確認された。一方、生活空間では、家具配置が個別的な滞在や休息を支え、交流は限定的であった。ボリューム構成と家具配置の組み合わせによる影響としては、「おっけい」（家具あり・三属性交流）では、内向きの家具配置と一棟型による連続した動線構成により、偶発的な交流が生じていた。「喜楽庭」（家具あり・二属性交流）では居場所形成はみられたものの、機能分離を基本とするため交流は限定的であった。「きじの里」および「やまびこ」では、生活の安定性が確保される一方、交流は主に同属性内にとどまる傾向がみられた（図6）。以上より、設計および運営においては、家具配置による身体方向の誘導を含め、意図する交流の水準に応じて食事室の配置とボリューム構成を選択することが重要であると考えられる。

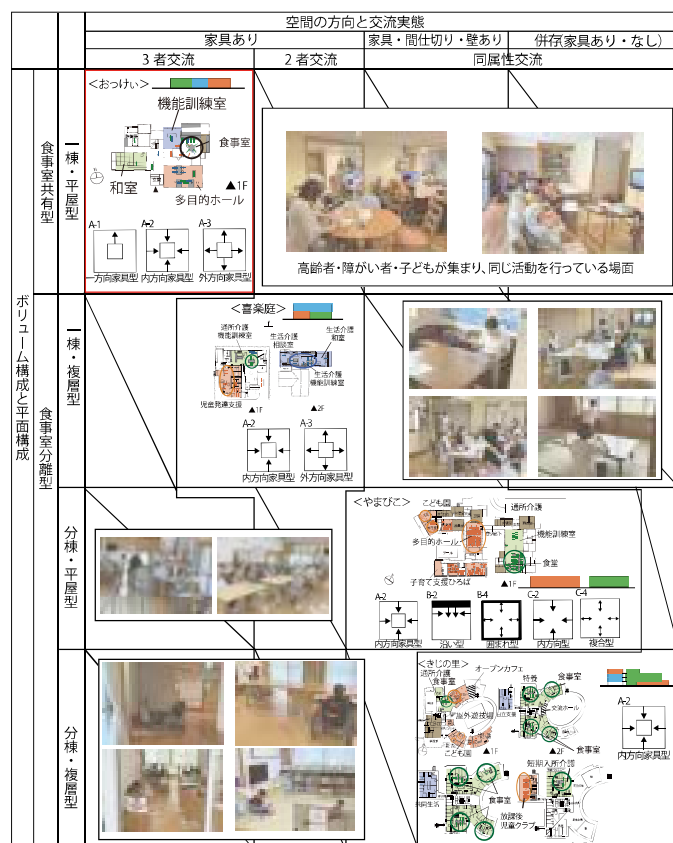


図6 建築構成と空間特性からみた共在の現れ方

- * 1 静岡理科大学 理工学部建築学科 学部 4 年
- * 2 静岡理科大学 理工学部建築学科 教授、博士（工学）
- * 3 静岡理科大学大学院 システム工学専攻 1 年

Student, Department of Architecture, Shizuoka Institute of Science and Technology.
Prof., Department of Architecture, Shizuoka Institute of Science and Technology, Dr. Eng.
Graduate Student, Shizuoka Institute of Science and Technology.